

学 位 請 求 論 文 要 旨

日本語の多義語の習得研究
—基本動詞「とる」の場合—

平成 30 年 1 月

城西国際大学大学院 人文科学研究科

比較文化専攻

黄 文 瀾

語彙の習得は第二言語能力の全般に関わり、第二言語習得の重要な内容である。語彙の多くは多義的であり、その多義の習得が語彙習得の質を高める鍵である。他方、語彙指導を教育現場で正面から取り上げることは少なく、多くの場合学習者任せとなっている。多義語の習得は基本的語義の習得に留まり、上級者でさえ、使用頻度の高い基本動詞の多義的拡張用法について十分理解していないとされている（松田 2000）。

多義語、特に多義的基本動詞の習得の重要性と困難性そして指導の不十分性という現状の中で、多義語習得支援の効果的な指導法の構築は日本語教育の直面する重要課題の1つである。しかし、効果的指導法を構築するには、本研究が研究目的とする多義語習得のメカニズムの解明が前提となる。学習者がどのように多義語を習得していくのか、その習得過程を、特に習得に影響を与える諸要因の追求に焦点化して究明する多義語習得研究の前進が必要であり、それなしに指導法を論じることはできないと考える。

先行研究においては、多義語の習得と多義語の語義構造との関係、及び学習者の持っている語義知識と語義構造が母語話者のそれとどう違うかを中心に研究が行われてきた。言い換えれば、多義語の語義構造が習得研究の枠組みとされていることが分かる。ところが、先行研究では、辞書にリストされた語義をそのまま利用する研究が多く、多義語の語義構造の分析から出発し、得られた語義構造を枠組みにしてなされた研究は、管見の限り松田（2004）と森山（2008）に限られている。そして、この二つの研究にも本研究の目的からすれば、限界がある。松田は「～込む」を、森山は格助詞を、それぞれ対象にしており、いずれも機能語の研究であるからである。機能語は内容語と違い、抽象性が高く、習得は難しいと推測されるが、その一方で、日本語の教室では、こうした機能語は一般的に教室活動の中心に置かれることが多く、丁寧な焦点化された指導を受ける。他方、本研究の研究対象とする「とる」のような多義的基本動詞の多義が教室で焦点化されて取り上げられることは殆どない。特に外国語環境で学ぶ学習者の習得過程に及ぼす、言語の教室での当該語の取り上げられ方の影響は無視できないと考えられる。従って、松田（2004）と森山（2008）を踏襲し、まず語義構造を明確化し、その上で習得過程を探るという研究を、内容語を対象として行う習得研究が必要である。

また、これまでの多義語習得研究の多くは多義語の習得と多義語の語義構造との関係に注目する一方で、学習者の言語生活、学習者ストラテジーといった言語外の要因に対する関心は低かったと言える。言語の習得は複雑な過程であり、様々な要因が相互に絡みあって進行する過程であると考えられる。多義語習得のメカニズムを明らかにするには、多義語習得の言語面の要因だけでなく、習得主体の学習者や学習者のおかれた習得環境などの言語外の要因にも光を当てることが重要であろうと考える。

以上を踏まえて、本研究では有効な多義語習得支援の基礎研究として、多義語習得のメカニズムを明らかにすることを目的に、多義的基本動詞「とる」を研究対象にして、次の研究課題に答えることを目指して3つの研究を行った。

研究 1 :

研究課題 : 「とる」の語義構造はどのようなものであるか。(「とる」の語義構造の提示)

研究 2 :

研究課題 : 「とる」の理解面の習得はどのようなものであるか。理解面の習得に、言語要因(語義構造)はどのように関わっているか。他に関わっている要因はあるか。(「とる」の理解面の習得に関与している要因の特定)

研究 3 :

研究課題 : 「とる」の産出面の習得はどのようなものであるか。産出面の習得に、言語要因(語義構造)はどのように関わっているか。他に関わっている要因はあるか。(「とる」の産出面の習得に関与している要因の特定)

研究 1 では、国広(1997)、松田(2006)、森山(2012)を踏まえて、認知意味論の手法を援用し、身体性の観点から「とる」の意味分析を行い、語義構造を提示した。「とる」の最も基本的な動作を表す語義を語義 A「手に持つ」とし、それをプロトタイプとした。この語義 A から 4 つの具体的動作を表す語義(B「選択して手に持つ」、C「手に持って、自分のものにする」、D「手に持って、他に移す」、E「手に持って、操作する」)への拡張がなされると捉える。この 4 つの具体的動作を表す語義からさらに他の語義が拡張されるとした。この結果を、語義構造図として作成した。

研究 2 では、翻訳テストを用いて、「とる」の理解面の習得実態を調査し、研究 3 では、産出テストを用いて「とる」の産出面の習得実態を調査した。調査で得られた結果をデータとして、研究 1 の意味分析で得られた「とる」の語義構造に照らし合わせることで、習得と語義構造の間に直接的な関係があるかどうかを見た。

研究 2 と研究 3 の結果から、語義の習得と語義の語義構造における階層との間に直接的な関係を見出すことはできないことが分かった。代わりに、語義構造に加えて学習者要因や環境要因などが習得に関与していることが分かった。これは、プロトタイプは習得が早く、非プロトタイプは習得が遅いという先行研究の知見に再考を求める結果であると言える。

本研究が対象とした外国語環境で日本語を学ぶ学習者の「とる」の習得には、学習者要因としての 1) 学習者の母語、2) 学習者の習得ストラテジー、3) 学習者の百科事典的知識及び環境要因としての 4) インプットとアウトプットの量と質が主に関与していることが示された。学習者は、多義語習得という課題に挑戦するに当たって、自らの既存能力を十分に生かしていること、即ち、母語知識を利用したり、様々なストラテジーを駆使したり、生活実践での百科事典的知識を利用したりして、多義語の多義の習得という課題に対応していることが分かった。しかしながら、これらの学習者要因は多義語習得の促進要因として機能しているとは限らず、逆に妨害する面も観察された。したがって、本研究で得

られた多義語の習得メカニズムについての結論は、学習者が言語生活において遭遇する多義語の用例を能動的に繰り返し使用しているうちに、多義語についての言語知識が構築され豊富化することとして捉えられると考えられる。これは認知言語学の提唱した使用基盤モデルの言語学習観を裏付ける結果であると言える。

本研究の意義としては、第一に、多義的基本動詞「とる」の語義構造を明らかにすることができた。基本動詞の特徴から出発して、身体性という観点から、「とる」の表す一連の基本的動作を意味拡張の起点とし、「とる」の多義のネットワークを提示したことは、基本動詞の意味分析の新たな方法を示したと考えられる。

第二に、「とる」の語義構造という言語要因だけでなく、習得ストラテジーという学習者要因と学習者の言語生活という環境要因から「とる」の多義の習得を考察し、学習者がどのように多義的基本動詞を習得するのか、その実態を浮き彫りにすることができた。これは、習得を単純化された形で取り扱うのではなく、習得が複雑な過程であることを、具体性を持って提示できたと考えられる。第二言語習得が、学習者が既存能力を持って第二言語と能動的にインターアクションするプロセスであることを示した点で意義がある。

第三に、多義語の多義理解の実相を見るために、先行研究に用いられたマルバツ判断による受容性判断テストではなく、翻訳テストを用いて調査を行った。これにより学習者の理解の実相に迫ることができた点で意義がある。これは多義語習得支援のための多義語習得研究の方法論上の改善に資すると考える。

本研究の限界と今後の課題として以下の点を挙げた。

第一に、データ収集法の問題である。研究2で用いた翻訳テストは受容性判断テストに比べれば、上の意義で述べたように利点がある。しかし、学習者の「とる」に対する理解が学習者の母語である中国語によって表出されることから、その中国語がどの程度学習者の理解を示しているのかについて推測が難しい部分があった。例えば、「パンフレットは自由にとってください」の「とる」の翻訳として、中国語の“拿”に訳した学習者が若干名いた。“拿”はそもそも多義動詞であり、学習者が「手に持つ」として理解したか、それとも、「自分のものにする」として理解したのか、回答からだけでは判断が困難であった。本研究では、発話思考法を用いて課題遂行中の思考過程を探ったが、この問いに答えられる十分なデータは得られなかった。したがって、今後、発話思考法の実施について更なる検討を加え改善すること、加えて、フォローアップ・インタビューなどにより、学習者の理解の内容を、論点を絞って確認することが考えられる。

第二に、調査文について再考する必要がある。本研究の調査文は「とる」が産出できるように文脈的収束性のより高いものを採用した。しかしながら、本研究の結果から、コロケーションとして成立する文とそうでない文によって調査結果が変わる可能性があることが分かった。また、コロケーションとして成立していても、言語生活で遭遇する頻度の影響によって研究結果が違う可能性も窺われた。以上の可能性が検証できる調査文を設定した研究が必要である。

第三に、本研究は外国語環境での学習者を対象にした研究である。第二言語環境において、語義構造、学習者要因、環境要因の三者がどのような相乗関係をつくり、習得に影響を及ぼすのかについては、本研究の研究結果からその詳細を予測することは難しい。第二言語環境下での学習者を対象とした検証が必要である。

第四に、「とる」に対応する中国語の語義を分析し、語義構造を得て、それと中国人学習者の中間言語のプロトタイプの関係を明らかにすることも課題として残っている。

第五に、本研究の結果を日本語教育に応用し、語義構造の直接的指導の効果を検証する研究についても、今後の課題としたい。